



橋本青雨『詩人ハイネ』明治36年(1903年)7月。金港堂発行。表紙

## 日本におけるハイネ研究 II 橋本青雨の『詩人ハイネ』

伊 東 勉

明治三十六年（1903年）七月に金港堂から橋本青雨の『詩人ハイネ』が刊行された。この著作は明治時代に発表された、もっともくわしいハイネ伝であるし、同時にまた当時のいわゆる赤門派のハイネ理解を代表しているのであるから、その長所と欠点をここで検討しよう。橋本青雨（本名は忠夫）はこのハイネ伝をかいたころには、東京帝国大学文科大学独逸文学科の学生であって、カール・フローレンツの指導を受けていた。「されどこは学業の余暇に成れるもの、及ばむ限の力を尽くしたれども、不備の点尚ほ多かるべし」と青雨自身が『例言』にかいている。

このハイネ伝は『少年詩人』、『青年詩人(上)』、『青年詩人(中)』、『青年詩人(下)』、『巴里生活』、『晩年の詩人』の六章からなっていて、『詩人ハイネ』の題名のしめすように、われらの詩人をあくまでも「詩人」として紹介し論評している。

ところで桜井天壇が明治三十六年十月発行の『帝国文学』第九卷第十号で、この『詩人ハイネ』について親切な批評をかいた。この批評の冒頭で天壇はつぎのようにのべている。

「ハイネは欧西の詩人中最多く邦人の間に伝稱せらるる者の一人なるべし。少年子弟の独逸語を解する者と解せざる者とを問わず、ハイネの名を以て紅恨紫怨の代名詞となすもの如し。」

この言葉のとおり、ハイネは当時の日本ではセンチメンタルな恋愛詩人として人気を得ていた。ところが橋本青雨はかれのハイネ伝において、この詩人の革命家としての一面もかなりくわしく説明している。田岡嶺雲のハイネ論においては、詩人としてのハイネと社会思想家ないし革命家としてのハイネとが「ヒューマニティー解放のための戦士」としてみごとに統一されていた。橋本青雨のこのハイネ論において、詩人と革命家とがハイネという人間のなかで、どのように共存しているかということが、重要な問題となる。

### 1 詩人としてのハイネ

橋本青雨はハイネを天才的な抒情詩人とみなしている。結論の部分のうちの、ハイネの詩への待徴づけをここに引用しよう。

「ハイネを読めるもの何人と雖も其語句平易にしてよく奇趣を咏じ、其語脈の明晰にしてよく幽味を託せるに驚かざるもの無し。是れ真心の声にして自然の樂なればなり。苦し夫れ時と処とを論ぜず、有ゆる読者の彼の詩に於て己が胸裡の反映を見るに至っては、彼はひとり独逸の思潮を謳ひたるに止らずして、実に世界の思潮を諷たればなり。……彼は神の子なり。世界の詩人なり。人類は謝恩の記念碑を樹つべくして、歴史は長く天才の二字を刻すべく、美神は長へに其の頭に桂冠を加ふべきなり。（『第六章 晩年の詩人、其五 結論。』222—223頁）」

この特徴づけはただし。ハイネは世界的詩人であるし、かれの時代のヨーロッパ社会の希望と苦悩をみごとな抒情詩に結晶させた天才として不滅である。ただし、ハイネの駆使した「平易な語句」と「明晰な語脈」とがドイツ古来の民謡によるものであることは、すでに明治二十八年（1895年）に青木昌吉が『帝国文学』第一卷第十二号の『俗謡を論ず』という論文で指摘しているが、橋本青雨はこの点にまったく気づかなかった。この論文で青木昌吉は、アルニムとブレンターノが協力して編集したドイツ民謡集“Des Knaben Wunderhorn”をハイネが推稱した事情を説明して、つぎのようにのべている。

「……ハイネが如何に俗謡に私淑したるかを知るに足らん、ハイネはもと両頭の蛇、正邪相闘ふの未遂に詩を毒し、身を傷ふに至る、故に其の詩歌は決して健全無瑕のものとは謂ふを得ず、然れども吾人の彼の詩歌を誦せざらんと欲して誦せざる能はざるもの、蓋し俗謡の軽快なる美調のあればなり。」

青木昌吉はハイネをここで「両頭の蛇」とよんでいる。青雨がハイネの激烈な風刺詩をどのように見ていたかをあきらかにするために、やや長文であるが、結論の一部をつぎに引用しよう。

「彼自ら謂へる如く、彼は情熱の児なり。此熾烈天を焦さむとする情熱は、彼をして主観詩人たらしめ、抒情詩において大功を成さしめたれども、亦此は彼をして終生煩悶せしめ苦悩せしめたり。（214頁）」

このようにハイネははげしい情熱（つまり感受性）をそなえた天成の「主観詩人」であって、多くのすぐれた抒情詩を創造した。けれども、「愛し愛せられて而して太陽輝かば則ち望足る（214頁）」というわけであるから、こうしたはげしい情熱は愛につつまれたときにだけ、うつくしい抒情詩をうみだす。ところが「幼にして早く広義の愛を缺き（ユダヤ人迫害などの社会的抑圧のこと—伊東）、長じては又狭義の愛を失ふ（アマリエへの失恋のこと—伊東）、情思焉ぞ平なるを得む（214頁）。」ハイネの奔騰する情熱が愛によってなだめられないで、うつくしい詩的形象として表現されないときに、痛烈な風刺詩がうまれる。

「甚深の悲痛肉を劈き骨を刻みて、末だ假象の詩美を感得するの暇あらざるや、情は茲に乱れ茲に狂ひて澎湃天に逆捲く激波を揚ぐ。而して其一瀉千里の勢は、巨巖も之を阻むべからず、大石も之を妨ぐべからず、却りて之を転じ之を砕かずんば止まざらむとす。茲に清麗可憐の詩筆は、忽ち変じて獷猛醜惡の武器となり、短刀直入、深く敵人の胸を貫きぬ。（『第六章 晩年の詩人、其五 結論。』214—215頁）」

情熱が憤怒と化して、完全な詩的表現をとりえないで奔出したのがハイネの風刺詩であるというわけである。この風刺詩は美麗可憐な詩の形態をとらないから、青雨はこれを「純然たる詩」とはみていない。ほかの個所でものべておいたが、ハイネの風刺詩の最高の傑作である『ドイツ・冬物語』にたいしても、青雨は否定的態度をとっている。これについてはのちにのべよう。したがって橋本青雨は『詩人ハイネ』において、ハイネの政治的社会的風刺詩はとりあげないで、ハイネの心情が率直にのべられている抒情詩だけを紹介している。

森鷗外の名訳『あまおとめ』が明治二十二年（1889年）に『於母影』に発表された。その後にハイネの抒情詩は『女学雑誌』、ことに『明星』などに翻訳、紹介されはじめて、明治三十四年（1901年）には尾上柴舟の『ハイネの詩』、明治三十五年（1902年）には三浦白水の『西詩余韻（仙台、尚文館発行）』などの訳詩集が刊行された。青雨はこれらの訳業のうえにたつて、抒情詩人としてのハイネを総合的、伝記的に日本に紹介しようところろみた。『詩人ハイネ』には、多くのハイネの訳詩が挿入され、それに懇切な解説がつけられていて、歌物語を読むような感じを読者にあたえる。さきに引用した『帝国文学』第九卷第十号の『詩人ハイネ』への批評で、桜井天壇が「著者は流麗なる筆を以て各節を記するに殆んど小説家の良心を以てせり」とかいているのは、こうした物語風の叙述を指しているのである。『詩人ハイネ』のなかに引用されているハイネの訳詩をつぎに列挙して、このハイネ伝の風格をあきらかにしよう。

1. 『ロオレイ』。『歌の本』のうち『帰郷』の2。全訳、三浦白水訳。この訳詩には石倉後洞の調製した楽譜がつけてある。巻頭。
2. 『わが母なるB・ハイネに』。『歌の本』のうち『若き悩み』の『十四行詩』にあり。部分訳、橋本青雨訳。（『詩人ハイネ』では『歌の本』は『歌の巻』と、『若き悩み』は『若き憂』となっている。）
3. 『擲弾兵』。『歌の本』のうち『若き悩み』の『譚詩調』の6。全訳、三浦白水訳。（『近衛兵』という題名になっている。）
4. 『ちつにふしぎな』。『歌の本』のうち『若き悩み』の『夢の絵』の2。部分訳、橋本青雨訳。
5. 『何が騒がす』。『歌の本』のうち『若き悩み』の『夢の絵』の5。部分訳、橋本青雨訳。（『夢の絵』は『詩人ハイネ』では『夢の悌』となっている。）
6. 『山の上まで』。『歌の本』のうち『抒情插曲』の53。全訳、三浦白水訳。（『抒情插曲』は『詩人ハイネ』では『幕間の歌』となっている。）
7. 『私は夢で』。『歌の本』のうち『抒情插曲』の55。全訳、三浦白水訳。
8. 『入日のなごり』。『歌の本』のうち『帰郷』の14。全訳、三浦白水訳。
9. 『きれいな漁師の』。『歌の本』のうち『帰郷』の8。全訳、森鷗外訳。有名な『あまおとめ』である。
10. 『純化』。『歌の本』のうち『北海』第一輯の11。部分訳、橋本青雨訳。（『北海』は『詩人ハイネ』では『北の海』となっている。）
11. 『試問』。『歌の本』のうち『北海』第二輯の7。全訳、三浦白水訳。
12. 『五月が来た』。『新詩集』のうち『新しい春』の5。全訳、三浦白水訳。
13. 『娘は磯辺に佇んで』。『新詩集』のうち『さまざまの相』の10。全訳、三浦白水訳。（『さまざまの相』は『詩人ハイネ』では『雑詠』となっている。）
14. 『天使たちに』。『ロマンツェーロー』のうち『ラザロ』の15。部分訳、橋本青雨訳。

15.『ビミニ島』。『最後の詩集』にあり。部分訳、橋本青雨訳。

16.『ラザロへ』の6。『最後の詩集』にあり。部分訳、橋本青雨訳。

17.『蓮の花』。『最後の詩集』にあり。部分訳、橋本青雨訳。

(詩の題名は岩波文庫の訳詩集のうちの名稱にしたがった。なお『ロマンツェーロー』の後に創造されたハイネの詩を『最後の詩集』にありとしておいた。それらの詩をまとめて **Letzte Gedichte** と青雨が総稱しているからである。)

いまやあきらかなように、橋本青雨が訳詩をしめして説明している詩は、母への愛情、妻マチルデへの愛情、ムーシュとハイネ自身との微妙な関係などをうたった詩をはじめとして、素朴な恋情や感懐をのべたものばかりである。青雨は『ロマンツェーロー』については、この詩集のなかの多くの詩の題名をあげて、それらの詩を説明してはいるが、訳詩はひとつ示しているだけである。またかれは『歌の本』と『新詩集』とを比較して、つぎのようにのべている。

『此(『新詩集』のここと一伊東)は思想の精緻を極めたれども、彼(『歌の本』のここと一伊東)の如く幻想豊贍ならず、彼は音調の洗練に欠くる所あれども、此に比すれば気魄雄渾なり。若し夫れ吾をして選ばしめむ乎、吾は前者を採るに躊躇せず。(『第五章 巴里生活、其四 二長篇及「新歌集」。』159頁。)

つまり橋本青雨は、幻想的であり、ときには『北海』でみられるような気宇広大な『歌の本』のなかの詩をハイネのもっともすぐれた詩とみなしていた。

三浦白水の訳詩は尾上柴舟のそれに似て、生硬な和歌調である。けれども青雨自身の訳詩は、やはり七五調ではあるけれども、原詩の趣向をただしく表現している。『蓮の花』の訳詩のなかのすぐれた一聯を例としてあげておこう。

「はちすの花の心をば  
月の光にひらくとも  
みのる<sup>いのち</sup>生命のそれならで  
ただ歌のみをうけぬべし。」

橋本青雨は『第六章 晩年の詩人、其三 最後の詩集』において、ハイネの長詩『ビミニ島』に六頁もついやして、くわしい説明をあたえる。勇敢な戦士であり、大航海者であったスペインのドン・ジュアン・ポンツェ・デ・レオンはキューバ島に総督として君臨しているが、自分の肉体の老衰をなげいている。そのとき、不老不死の泉のわきでる楽園の島ビミニのことをつたえきいて、ついにその島を求めて、おおくの従者をつれて航海にでかける。航海をつづけるうちに、ドン・ジュアンはしだいに衰弱して、ついに死亡した。永遠の忘却である死こそ、楽園の島であったというわけである。この詩について青雨はのべている。「四行一百二十八句、詩人が晩年の人生観は歴然として現はれたり。其深刻なる諧謔の中、熱涙の斑々として滴りたる、何人も同情を禁ずる能はざる所、蓋し集中の絶誦なるべし。(『第六章 晩年の詩人、其三 最後の詩集。』194頁)」

歴史的社会的人間としてのハイネは不滅である。人民解放のためのハイネの戦闘の詩文はいつまでも人民大衆に愛読されるだろう。けれども肉体をそなえた個人としてのハイネは、永遠の忘却である死に樂園島を見いだす。そして、これははげしい苦闘をつづけてきた詩人にとっては、たいした慰籍である。青雨は人民解放の戦士としてのハイネではなくて、うつくしい詩情をそなえた詩人ハイネを重要視したので、壮烈な詩『決死の哨兵 *Enfant perdu*』ではなくて、この『ミニ島』を晩年の『絶誦』としてとりあげた。

## 2 革命家としてのハイネ

たしかに橋本青雨はハイネを革命家としてとりあつかっている。ここで、いくつかの顕著な文章を例示しておこう。

1.「我が詩人の後に『若き独逸』派文士を率いて政界に奪戦するに至りしも、半は茲に其起因を帰すべくして、而も渠をして此に赴かしめたるは、実に此のラヘルが陰に陽に感化鼓舞せる結果なりしなり。(『第二章 青年詩人(上)、其三 ベルリン生活。』53頁)」

これはハイネのベルリン生活(1821-23年)のあいだにファルンハーゲン・フォン・エンゼの妻ラーエル(Rahel)が詩人にあたえた精神的影響をのべた文章。

2.「ミュンヘンなる出版業者コッタは詩人の名声を聞き、其の『アルゲマイネ・ポリティッシェ・アンナアレン』の編輯を補助せむこと懇請し来りしなり。是れ遊英以来ハイネが脳裏に澆漑たる社会改革の軍を起すべき好機会なるを以て、直ちに其請を諾し、……かくてハイネは革命の陣地ミュンヘンに入れり。(『第四章 青年詩人(下)、其三 評論記者。』121、123頁)。」

これは1827年のハイネのミュンヘンへの移住を叙した文章。

3.「今やハイネは静閑を悦ぶ人たる能わず、奮然書を擲って叫んで曰ふ、『余はもはや休養を希はじ。今にして知る。わが為さむと欲し、為すべき、将た為さざるべからざることを。余は革命の児なり。……余は死の戦に於てこそ冕冠を戴かめ。……余なるもの即ち歡喜なり、詩歌なり、剣なり、焰なり。』 満身是剣、是焰、宛として自由の戦士の躍るを見ずや。(『青年詩人(下)、其五 革命の児。』134頁)」

これはヘルゴランド島でフランス七月革命の報知をうけたときのハイネの感激をのべた文章。

4.「彼の七月革命以来、自由の叫声百雷の如くラインの対岸を轟かして、所謂『青年独逸』*Das junge Deutschland* 派の詩人並び起り、或は大胆直截なる論議を以て、或は意を詩歌小説に託して、政府の暴政を責め、個人の自由を唱へて、盛に輿論の喚起に努めたりしが、ハイネも亦巴里に在りて、彼の『独逸倶楽部』を率い、遥かに之と相呼応し、隠然首領を以て目せられるに至り。(『第五章 巴里生活、其三 仏政府の年金。』148頁)」

5.「革命の子今如何。剣を掲げて躍出しか。あらず、若し十年前のハイネなりせば、縦令不随の身なりとも、弾丸雨飛の間に転びいでけむも知るべからざれども、今はしも熱血に眼眩む青春の詩人にあらず、人生の苦楽を味ひ尽くして冷眼世を觀ずる白髪翁なり。かの熱血詩人パイロ

ンと雖、假すにハイネの齡を以てせば、冷然として唯暴動の愚を嗤はんのみ。況んや亦ハイネは已に能く所謂『詩人的国民』の弱点を看破し尽くせるに於てをや。花の結びて実となれるのみ、湯の冷えて水となれるのみ。ハイネの冷淡、豈敢て恠むに足らむや。（『第五章 巴里生活、其五世路難。』 170頁）」

これはフランス二月革命にたいするハイネの態度をのべた文章であるが、事実とはちがっている。ハイネは二月革命に同情的であつたし、二月革命當時も、そしてそれ以後も、かれの革命的民主主義をまもりつづけた。

ハイネがもっぱらセンチメンタルな詩人として愛好されていた明治三十年代に、革命家としてのハイネをこのように強調したのは橋本青雨のすぐれた功績であつた。けれども、革命家としてのハイネについての青雨の理解には不十分な点があるので、それをつぎに指摘しよう。

第一。ハイネの敵がただしく把握されていない。たしかに青雨は『猶太人の悲痛 Judenschmerz』という言葉をししばもちいて、当時のユダヤ人迫害がハイネを革命家たらしめた主要な原因であるとしている。この点でかれは田岡嶺雲や登張竹風と一致している。またかれはツァーリズムを盟主としメッテルニヒを支配人とする神聖同盟の反動的役割をつぎのようにただしく説明する。

「鬼哭啾々の一孤島にナポレオン満腔の恨を抱いて幽せられし時、狡兎メッテルニヒが奸謀に由りて神聖同盟は新に全欧に怪光を放ちぬ。自由、平和、四海同胞、名は即ち美なれども其の実は陋の陋を極め、専政、压抑、言論の自由を防遏し、革進の生気を杜絶せむが其目的、たりしなり。然れどもルウテル一たび革命を絶叫してより、滔々として人心の深奥を暗流せる一大思潮は、如何ぞ是が為に堰塞せられむ。（『第二章 青年詩人、(上)、其二 ボン大学の思潮。』 40頁）」

この言葉のとおりである。けれどもハイネが政治的に正面の敵としていたのはプロイセン王政である。温情主義（Paternalismus）と啓蒙主義でたくみに偽装しながら、封建的身分制的専制主義を強固に確立していたプロイセン王政こそ、ドイツにおける反動の支柱であつた。これにハイネは打撃を集中した。たとえば一八三三年に發表された『フランスの状態』の序文がそれである。『ドイツ・冬物語』にもプロイセン王政への憎悪が随所に奔出している。この点を青雨は見おとしている。

第二。ハイネの革命思想というのは、田岡嶺雲がただしく理解しているように、人間性の解放である。ハイネにとっては、専制君主制を立憲王政にするとか、あるいは共和制に変革するとかいう政治革命は根本的な問題ではなくて、各個人の人間性がのびのびと發揮される社会を創造することが問題なのであつた。それゆえにハイネはフランス亡命後にまずサン・シモン主義に傾倒し、共産主義と対決をつづけ、マルクスと親交をむすんで多くのことをまなび、論理と方法をもつ科学的社会主義にしだいに近づいていった。これはつまり、ブルジョアの革命的民主主義から共産主義へと發展する進路である。この点を青雨はぼんやりとしか把握しなかつたようだ。それゆえに自由主義的小ブルジョアの反抗である「青年独逸」派（この派の浅薄な政治文学をハイネ



は『アッタ・トル』で嘲笑している)とパリのハイネが「相呼応した」とか、ハイネが「冷眼世を觀ずる白髮の老翁」としてフランス二月革命に「冷淡」であったとか書いている。

このふたつの欠点は、カール・フローレンツを指導者とする東京帝国大学文科大学逸逸文学科の科学的認識の限界をしめすものである。けれども、この欠点のために、青雨のえがきだした革命家ハイネの人間像は首尾一貫しない、輪廓のぼやけたものになってしまった。

### 3 詩人と革命家との不調和

もちろん橋本青雨はハイネの政治的社会的風刺詩にまったく言及していないわけではない。たとえば『アッタ・トル』についてはつぎのようにのべている。

「一頭の熊、名をアッタ・トウロルといふ、……其熊が呻吟咆哮を藉りて、或は政界の奸策を打撃し、或は時代の弊風を指摘し、或は『赤帽を被りつつ実は豚尾を着けたる』文士の卑劣を譏り、諛諂百出、機才横生、洵に奇觀なり。然れども、是れ嚴正なる意義に於ては詩と謂ふべからじ。(『第五章 巴里生活、其四 二長篇及「新歌集」。』156頁)」

また『ドイツ・冬物語』については、つぎのようである。

「例に依りて諷刺暗譏の利刃諸処に閃めき、保守党政府派の胸を貫きしかば益々其憎悪を蒙りたれども、他面に於ては其巧妙精緻なる趣姿を賞して読書社会の歡迎非常なりき。さはれこも亦前者(『アッタ・トル』のこと一伊東)と同じく純然たる詩と看るべきや否や頗る疑はしく、多くの評家は否定に傾くものの如し。(『第五章 巴里生活、其四 二長篇及「新歌集」。』158頁)」

また詩集『ロマンツェーロー』のなかの二三の風刺詩にも青雨は言及している。

「長篇“Vitzliputzli”には機才縦横に現われたり。„Karl 1.“と„Maria Antoinette“とは激烈なる諷刺の為に獨の政府をして忿怒を増さしめきとなり。(『第六章 晩年の詩人、其一 蒲団の墓。』177頁)」

けれども橋本青雨は政治的社会的風刺詩は本来の詩ではないとかがえていたし、ハイネの革命思想をただしく把握していなかったし、そのうえハイネの風刺詩を詩的形象の洗練されない「獷猛醜惡」な作品とさえ見なしていたので、政治的社会的詩人としてのハイネをまったくとりあげない。そこで『詩人ハイネ』では、愛する人びとへのやさしい心情や、自然にたいする素朴な感動を、可憐にあるいは美麗にうたいあげる天性の抒情詩人の生涯が「小説的」に叙述されていて、その天性の抒情詩人が時おりは革命家の風貌をしめすということになった。ヘーゲルをまつまでもなく、抒情詩とは詩人の主観が芸術的形象によって客観化されるものであるから、革命家ハイネの主観は政治的社会的な抒情詩ないし風刺詩として結晶する。ハイネのこうした政治詩ないし社会詩を青雨はほとんど無視してしまったので、片腕をもぎとられたハイネ像ができあがった。青雨はシャープのハイネ觀に接近して、ハイネを薄志弱行の人と見なすことにさえた。これは『第六章 晩年の詩人 其五 結論』で、つぎのようにのべている。



「究竟するに彼が欠点は愛無きに在らずして、むしろ神経あまりに鋭敏にして、身体の極めて虚弱なるに在らむ。むしろ現実に熱着すること酷しくして、理想の追求を往々にして忘れしに在らむ。むしろ情熱あまりに強烈にして道念の薄弱なりしに在らむ。(216—217頁)」

詩人としてのハイネの最大の長所は、ことに1840年代以後の社会的政治的な抒情詩ないし風刺詩にある。それらの晩年の詩はいよいよアリスティックになり、社会主義的傾向をしだいに強めている。ハイネの風刺には、明治30年代にはことに高山樗牛がはやくも注目していた。明治時代の末から大正時代にかけて佐藤春夫や生田春月がこの風刺詩をただしく理解しようとして、昭和十年前後に森山啓がその本質をついに把握した。明治36年にまだ大学生であった橋本青雨がハイネの政治的社会的抒情詩をただしく理解できなかったのは当然のことである。

こうした欠点はあるけれども、革命家としてのハイネを強調した点において、またハイネの生涯と抒情詩の発展過程を順序よく、田岡嶺雲よりもいっそう詳細に説明した点において、橋本青雨の『詩人ハイネ』は当時の日本人のハイネ理解にかなりの貢献をした。

なおここで、ふたつの問題についてのべておこう。それは当時の外国文学者とそのひとりである橋本青雨とのハイネ理解のふかさをたしかめるためである。

### 1 ハイネとロマン主義の関係

明治37年(1904年)に富山房から葉山万次郎の『独逸国民文学史』が発行された。これは日本で最初のドイツ文学史であって、主として *Hermann Kluge, Geschichte der deutschen National-Literatur* によったものといわれている。このドイツ文学史のうちの『ロマンティスムス』の「第五章 ロマンティスムス派の後継者および対立せる一派」で葉山はハイネについて、つぎのようにのべている。

「ハイ子は、ロマンティスムス主義の盛なる鼓吹者なり。悲劇数篇皆此主義を發揮せり。されどハイ子の本領は、悲劇よりは、抒情詩及び紀行文にあり。紀行文(ライゼヒルデル)中の諸篇は風刺的にして、奇語、警句人の肺腑を貫き、然かも行文勇健にして流麗なり。……紀行文に於て漫罵、酷評をなせるハイ子は、抒情詩に於て、錦腸の奥底を絞り出し、句々金玉の響あり、篇々熱涙を以て溢る。詩集『ブーフ デル、リーデル』、『ノイエ・ゲディヒテ』及び『ロマンチェロ』の三巻あり。孰れも情緒を抒ぶること、濃かにして、声調優美なり。されど文辞の奇矯を好むは;ハイ子の欠点にして、詩的のものを、滑稽的ならしめたりとの非難を免かれざるなり。(538—539頁)」

けれども葉山万次郎は同時にまたハイネを青年独逸派の創始者とも見なしている。おなじ『ロマンティスムス』の「第八章 ダス、ユンゲ、ドイツチュランド」のなかで、つぎのようにのべている。

「この派の詩人は、政治的の題目を捕へ、時事問題を歌わんとし、文芸と実世間とを接近せしめんとしたるなり。此反動的運動の原動者を以て目せらるるは、風刺的の文字を弄したる

ハイ子及び世俗の宿弊を痛撃したるルードキヒ、ビョル子の二人なり。グッツコー及びラウベの二人出づるに及んで、此主義の旗幟は愈々鮮明となれり。(554頁)」

葉山万次郎のようにハイネをドイツ・ロマン派に属する詩人と見なすというのが、当時の外国文学者に共通していた。

明治31年(1898年)三月に発行された『文学界』終刊号には戸川秋骨の『塵窓余談』という論文がのせてある。この論文で秋骨は十九世紀のヨーロッパの主要な文学流派としてセンチメンタリズムと「ロオマンチズム」、そして古来のクラッシズムをあげて、ハイネをセンチメンタリズムの代表的な詩人としている。ハイネが明治三十年代にセンチメンタルな詩人にされてしまった理論的根拠は、この秋骨の論文にあるようだ。ここで秋骨の言葉を紹介しておこう。

「事々に哀れに涙を催すセンチメンタリズムは、吾が国の文学に比ぶべきか。かれにはさすがに幾世を経たる素養あり。哲学も宗教も自からに其の心を堅ふせり。其の涙や其の悲や亦異なる処あり、評家の言に従へば、此派はかの西教の一派より出でしと云ふ。左れば彼のハイ子の如き、ラマルチンの如き、何れも既に文芸の醇なるものに近からんとせり。(第三章)」高山樗牛はハイネをロマン主義文学からその後の近世文学へ移行した詩人と見なしている。明治三十一年(1898年)3月に雑誌『太陽』のなかの『ハイネ』という小論で樗牛はのべている。

「読売の記者なにがし、独逸の詩人ハイネをば『中古派の勇将』と書かれしはゆゆしき誤りところ覚ゆれ。ハイネはバイロンと共に中古派より近世文学へ移る変遷時代の詩人(圏点は樗牛)なることは、史家の定論と云ふべきに非ずや。(博文館、『樗牛全集』第五巻、560頁)」ここで中古派というのは、ロマン主義の文学のことである。樗牛自身が「中世派」という言葉に「ロンマチク」とルビをつけている(『樗牛全集』第二巻「詩的の両面とその利弊(明治三十一年)」523頁)。さらにまた樗牛は明治三十三年(1900年)に雑誌『文学評論』に発表した『煩瑣学風と文学者』という小論で「詩人ハイネはロマンチク派の運動を最後まで続けたる人なりき(『樗牛全集』第二巻774頁)とのべている。

生田長江は明治四十一年九月に新潮社から刊行された『外国文学研究法』という著書でドイツ文学についてものべている。この本の「第六章 クラシック文学の研究、第六節 独逸文学」のなかで、レッシング、ゲーテ、シラー、ドイツ・ロマン派、クライストという順序でドイツ近代文学の発展過程を明解に叙述して、ハイネについては、そのすぐれた抒情詩と激烈な風刺とを強調する。ところで生田長江もまたハイネをドイツ・ロマン派の詩人と見なしている。

「ロマンティックの文学はハイ子に至って極まった。ハイ子以後の文学を、ルドルフ・ギンバルグの作『ユング・ドイツチランド』に因って、『新独逸派』と名ける。(『外国文学研究法』第六章、第六節。170頁)」

このように葉山万次郎をはじめとして、秋骨、樗牛、長江などの当時の代表的な外国文学者が、ハイネをドイツ・ロマン派の詩人と見なしていた。この点において橋本青雨は一歩ぬきんでている。青雨はもちろん、ハイネが青年時代にアルント、ブレンターノ、ウォルター・スコットを耽

読したこと、スコットの影響のもとに、『アルマンゾール』と『ラトクリフ』というふたつの劇詩をかいたこと、そしてボン大学の教授であったドイツ・ロマン派の理論家アウグスト・シュレーゲルに学生として教えをうけたことなどをくわしく説明している。けれども青雨は、ハイネがその著書『ロマン派』においてドイツ・ロマン派を容赦なく批判して、この反動的文学流派と訣別したことを感じとっていたので、ハイネのこの名著について、つぎのようにのべている。

「1832年、ハイネは『ロマンテチック派』*Romantische Schule*の一書を著し、其主張、其起原、其変遷を討究し、古きはゲエテ、シルレルより同時代の諸文士プレタノ、アルニム、フウケ等を品隲して、褒貶、賛否何等の畏憚なく、縦横の才筆を揮って、大に人目を愕かしたり。思想亦昔日の如く然ばかり狂妄に在らず、一方に破壊的熱罵を逞くしつつも、他方には密かに建設の曙光を望むものの如かりき。(『第五章 巴里生活、其三 仏政府の年金。』149頁)」

ハイネは『告白』の冒頭において、自分が「脱走したロマン主義者 *Romantique défroqué*」であることをみとめている。葉山万次郎においては、ドイツ・ロマン派の詩人ハイネと青年ドイツ派の創始者としてのハイネが関連をもたないで並存している。生田長江はハイネをドイツ・ロマン派の最後の詩人とみなしているし、高山樗牛はハイネをドイツのロマン主義を「最後まで続けた人」とよんでいる。橋本青雨は革命家としてのハイネをある程度までただしく理解していたので、この詩人がドイツ・ロマン派に安住しえなかったことを知っていた。それゆえに青雨は、『ロマン派』においてハイネが「密かに建設の曙光を望むものの如かりき」とかいたのである。また青雨は『詩人ハイネ』の第六章の「結論」においても、ハイネを「ロマンティック派の進軍に随ひつつ、而も非ロマンティック派の驍将たり(211-212頁)」とよんでいる。ハイネとドイツ・ロマン派との関係について、明治三十年代の外国文学者の認識はこの程度にとどまっていた、橋本青雨がそのうちでも、もっともすぐれていた。

## 2 ハイネの散文について

明治二十九年(1896年)にすでに青木昌吉が『帝国文学』第二巻第八号掲載の「独逸の散文」という論文において、ハイネの散文について、かなりただししい評価をあたえている。この論文で青木はレッシング、ヘルダー、ゲーテ、そしてハイネというドイツ近世の四大文章家の散文を論じている。ややながくなるが、ハイネの部分をごくに引用しよう。

「ハイネは喜んで弁難攻撃の文を作る、議論警拔読者の目を眩す。然れとも其活動の余りに劇しくして、時に、閑雅の趣を欠き、鋒鋦の甚た鋭くして、間、矯激の言多し。ハイネの文に、最も見るべきは遊紀の文なり、其旅行記の文は、時に、嘲罵の調、人をして耳を掩はしむるものなきにあらざるも、着想の奇、変化の妙、優に、其才藻の富贍を見るに足る。其天下の形勢、人物、風俗を叙述するは、人の弱点を穿ちて、機微に入り、其山巔水涯に、肆意、遊覧するの状を描出するの精巧なるは、流翠紙上に滴り、清涼言外に掬すべし。吾人万里の

外に在る者をして、目に其風光を睹て、脚に其勝跡を踐むか如き思あらしむるもの洵に偉なりと謂ふべし。嗚呼、ハイネの才と、文とを以てして、祖国の盛を鳴らすに綽々として余裕あり、然るに、事、茲に出てすしして、軽率、自肆、放言顧みず、独り、国憂を娛しみ、私憤を抒ふるの文を作り、遂に神耗形悴、客土に窮死するに終らしむ、誠に、惜しむべきかな。」

こうした言葉によって青木昌吉は、ハイネの論文がきわめて激烈な論調であること、ハイネの紀行文が時には、はげしい嘲罵をとばしながら、自然と人間にたいするすどい正確な観察にうらずけられて、形象のゆたかな、いきいきとした描写となっていることをあきらかにした。こうしたすぐれた散文を一貫してながれている理論的なハイネの思想については、なんの理解もしめていないけれども、帝国大学文科大学独逸文学科におけるハイネの散文についての考察は当時すでに、この程度にまで達していた。青木昌吉はのちにこの科の主任教授になった。

橋本青雨もまたハイネの散文を青木昌吉とおなじようにたかく評価して、ゲーテ、シラーの散文につぐものとしている。「第六章 晩年の詩人 其五 結論」において、つぎのようにのべている。

「詩人ハイネは亦散文に長じたり。其清新の情想をやるに、縦横の機才と流麗の筆致を以てす。而して其秀逸なるものに至ては全然無韻の詩を成せり。独に散文を以て鳴るもの多しと雖、ゲーテを除かば彼に拮抗せらるべきもの蓋し尠かるべし。……惜むらくは崇高と雄渾とに於てゲーテ、シルレルに一步を譲らざるべからざれども、亦散文界に重要な地点を占むと謂ひつべし。(220—221頁)」

橋本青雨はこの著書において、詩人としてのハイネの生涯を叙述しているのであるが、詩趣ゆたかなハイネの散文にも言及している。ことに『第三章 青年詩人(中) 其三 「ハルツの旅」』においては、八頁をついやして、ハイネのこのすぐれた紀行文にくわしい説明をあたえている。『ノルデルナイ』、『観想、ル・グランの書』、『イギリス断片』、『イタリア紀行(『旅の絵姿』第三卷)』、などについても適当な解説をしている。ハイネの『告白』を『懺悔録』いう題に訳して、「第六章 晩年の詩人」で、この『告白』にのべられているハイネの晩年の心境をずいぶん親切に紹介している。橋本青雨はハイネの散文もこのようにくわしく説明することによって、詩人としてのハイネ像をいっそう完全なものにしようと努力したのである。